

安蘇史談会 会報『史談』第三〇号（平成二六年五月）抜刷

須永元とその時代

大川圭吾

須永元とその時代

大川 圭 吾

はじめに

須永元と須永文庫については、佐野に住んでいる方なら一度は聞いたことがあると思います。これから須永元のことについて述べますが、須永元が生きた明治から昭和の時代は朝鮮半島が現在の二つの国、大韓民国と北朝鮮・朝鮮民主主義人民共和国に分裂する前の話であることをあらかじめお断りしておきます。さらに参考にした資料に若干の食い違いがある部分もありましたので、できうる限り事実関係には注意を払いましたが歴史的な話ゆえ、この件に關しても丁願います。

一 須永文庫との出会い

須永文庫のことを私が初めて聞いたのは、はっきりと覚えてはいませんが、たぶん小学生の頃だったと思います。その時は須永と言う人が学校の図書館に多くの本を寄付



写真1 須永元の肖像

たのを不思議に思ったものです。その後、中学生になりましたが、そこにも須永文庫と呼ばれている本はなく、私の疑問はそのままになっておりました。その後、私も二十代の後半になり偶然の機会から歴史には全く興味は無かったのですが、安蘇史談会と言う歴史サークルを友人たちと一緒に作りしました。そこで正式な会員ではありませんでしたが、佐野生まれで当時は桐生市在住の須永元研究家と呼ばれている藤沼博さんと出会い、私も少しずつ須永文庫に興味を持つて行きました。毎年五月に行っている会の自主講座である「安蘇の風土と歴史」の一講座を藤沼さんにお願いし、須永元のことを話して頂きました。今から三十年近く前の休日に図書館でやったと記憶しております。その会

し、それを須永文庫と名付けて貸し出ししているものだと思っていました。それにしては学校にそのような文庫が無かつ

場に入ると気品のあるご婦人が座っており、初めて見る人だったので誰だろうと思ったものです。講演の最後にその人は藤沼さんから須永元の遺族の方であると紹介されました。この時は現在住んでいる東京から須永元の話を聞くために、わざわざ佐野まで足を運んでくれたそうです。その時は何も思いませんでしたが、今回須永元のことを調べていくうちに、須永元に実子はいなかったようです。ではあのご婦人は誰かと言う訳になりますが、どうも須永家は彼の妹(守屋清子)の次女(行子)一家五人を養子として向かい入れ、その方の長女だったようです。

二. 金玉均との邂逅

現在の市営プールの場所が須永本屋敷跡で、彼はここで生まれました。生家は豪農で使用人も多く、当地の豊かな菊沢川の水を利用して水車、通称大橋ぐるまと呼ばれていました。それが精米業を営んでいました。父親は佐野で水車業を始めた人の四代目で市重郎と言います。水車業の組合長をやっていたそうです。佐野市史の資料編3近代に佐野水車業組合規則が載っており、最後に須永市重郎の名前を見つけることができます。その市重郎の長男である元は幼い日から和漢の書に親しみ、十代の終わりに上京して二松学舎で三島中洲に漢学を学び、また元彦根藩家老の岡本

黄石に師事し、多くの文人たちに知られることになりました。須永文庫の中にこの岡本黄石から譲られた数多くの書籍類が残されています。その後、一九歳で慶応義塾に学び、福沢諭吉の影響を強く受けました。福沢諭吉と言えば学問のすすめを著した人であり、一万円札に肖像画が描かれている人ですから知らない人はいないでしょう。そんな人と佐野生まれの須永が深い交流を持ち、彼に強い影響を与えたと考えるだけでも、何故か気持ちがわくわくするものがあります。後年の須永の行動と福沢の論文の内容を考える時、いかに須永は福沢の影響を受けたかを伺い知ることができます。作家の角田房子氏は、当時は新聞にも朝鮮の記事の多い時代ではあったが、須永が朝鮮に異常なまでの強い関心を持ち、日韓併合のころまで朝鮮独立運動を支援し、また生涯を通して亡命者やその家族を庇護した動機は、福沢の対韓問題についての論説に接したためではなかったか、と書いています。またその頃慶応義塾には朝鮮から日本初の留学生が多数入学していました。金玉均は「日本がアジアのイギリスになるならば、我々朝鮮をアジアのフランス



写真2 朝鮮独立運動の志士
金玉均

にしなければならぬ」と語って、日本への留学生たちの活躍に期待したといえます。塾生であった須永はここで多感な青春時代を送り、留学生を通じてアジア問題に目を開かされました。須永は金玉均、朴泳孝など「大物」をはじめ多くの亡命者を支援しましたが、特に尊敬し、親交を結び、強い影響を受けたのは金玉均でした。金玉均との出会いがなければ、須永はあれほど朝鮮問題に関わることはなかったであろう、と言われております。わずか数十年の人生の中で、このような人物に出会えた須永に対して、私は強い羨望の念を抱かずにはられません。

三. 甲申の変と閔妃暗殺事件

明治一七年（一八八四）の一二月に京城、現在のソウルで発生した軍市政変、いわゆる甲申の変に破れた金玉均、朴泳孝ら九人が日本に亡命してきて須永元との交流が始まります。朝鮮独立運動の志士と



写真3 須永元(左)と朴泳孝
(明治22年(1889)撮影)

呼ばれた金玉均は、社会の教科書にも出てきたので知っている人も多いと思いますが、明治政府により冷遇され孤島である小笠原の父島に送られ、その後には北海道で幽閉同様の歳月を過ごしたのちに東京、最後には上海で朝鮮の刺客により射殺されます。その時の須永の日記には悲痛な文字で埋めつくされたと言います。話は戻りますが、須永は小笠原にいた金玉均と文通を初めて五年間、そして北海道から上京した彼を上野駅で迎えたのが最初でした。このとき須永元は二二歳、金玉均は三九歳でした。それから須永は金玉均の人柄と学識に魅了され、五年後に上海で暗殺されるまで佐野の須永邸に期間は不明ですが、かなりの日数かくまっていたようです。朴泳孝もたびたび須永邸を訪れていました。日本に亡命中の明治二二年（一八八九）に撮影した朴泳孝と須永の二人の写真と、大正年間に京城の朴泳孝邸内で撮影した和服姿の須永と韓国服姿の朴泳孝の写真が残っております。朴泳孝は永年の亡命生活の後に帰国し、内部大臣となりますが、国内親衛隊の実権を手中におさめようとして失敗し、再び日本に亡命してきます。この朴泳孝との交友は最も長く、須永が晩年に京城を訪れ東大門近くの朴泳孝邸を尋ねましたら、彼は重病の床にいました。彼はその次の年に亡くなっています。

昭和九年（一九三四）発行の佐野史跡写真帖、この本は宮内庁を通して昭和天皇に献上したのですが、ここには

金玉均の居室と呼ばれた須永元の母屋と彼の書が載っております。この写真4には二人の人物が写っていますが、須永と奥さんでしょうか。また昭和六二年（一九八七）に佐野市郷土博物館で展示した須永文庫資料展、「須永元と明治の文人たち」の図録の中には、「老子の一節を送る」と題した金玉均の書と、「杜甫の詩を贈る」と題した朴泳孝の書、及び二松学舎の三島中洲の書があります。ここで良い機会ですから金玉均の「老子の一節を送る」の一部を口語訳で紹介しておきます。「聖人とは何か人の為になることをしても、その見返りをあてにせず、立派な仕事をして、その成果にいつまでも満足せず、何かを望むということ



写真4 金玉均の居室と呼ばれた須永邸

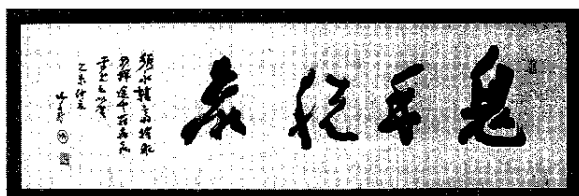


写真5 勝海舟が須永元に送った書「鬼手脱命」

をせず、自分の偉さを人にひけらかさない人のことである」。さらに私たちが知っている人としては勝海舟がおり、「全快を祝つて」と言う書を須永に対して贈っております。内容を同じく口語訳で紹介しておきます。「あやうく鬼の手から命をのがれましたね。須永元さんは、朝鮮に渡ろうとしていましたが、途中疫病にかかり、幸いあの世行きだけはまぬがれました。それを祝つて。明治二八年陰暦五月」。須永は朴泳孝と一緒に岡本黄石の紹介により赤坂氷川町の邸宅に勝海舟を尋ねています。

その後明治二八年（一八九五）一〇月に関妃暗殺事件が起き、その時に須永は京城にいましたが、幸か不幸か腸チフスにかかっていたために事件には巻き込まれませんでした。この時に出会ったのが禹範善と黄鉄です。禹範善と黄鉄はその後に日本に亡命し、禹範善については広島県呉市で惨殺され、その墓は一旦東京の青山墓地に葬られました。須永によつて佐野の妙顕寺に移されます。黄鉄は過去帳によりますと東京本郷の東片町で亡くなっており、お墓は同じく堀米の妙顕寺にあります。佐野史跡写真帖には禹範善と黄鉄の顔写真と共にお墓の写真が載っております。またこの佐野史跡写真帖には序

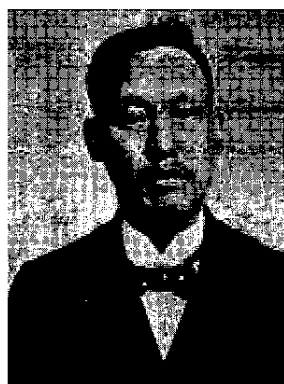


写真6 禹範善

として須永が漢詩を寄せています。さらに須永はこの写真帖を作成するにあたり顧問になっております。

四、田中正造との出会いから没まで



写真7 田中正造

須永元と田中正造は歳が二七歳離れていたとは言え同時代の人ですから、各種の会合でときどき顔を会わせており、かなりのつき合いがあったようです。田中正造は須永元に対して書簡を寄せるなど、明治二十三年（一八九〇）の田中正造の衆議院議員当選やその後の渡良瀬川鉋毒問題へ関心が深まるまで二人の関係は薄くなかったようです。その証拠に須永の日記には「田中來訪」とひんばんに出てきており、須永の下宿に一泊したことも記されております。

明治四三年（一九一〇）に韓国併合条約が調印され、この時から昭和二〇年（一九四五）までの三六間にわたる朝鮮半島に対しての日本の植民地支配が始まります。この併合条約により須永は「我が為すことは終わりけり」として、それ以後政治には一切関与しなかったと言われている。日本の対韓政策への失望は、政治の世界へのうとましさを生み、この純粋な漢詩人の心にいつまでも影を落として

たと言われております。しかし、東邦協会からの縁で頭山満の玄洋社・黒竜会員との交流の中で完全には政治の世界から離れることは無かったと私は考えております。その後は故郷の佐野に帰って農業経営を行います。その間にも漢詩を愛し、また書画や骨董にも相当な興味を持ち続けていました。

時代は移り軍国時代の荒波にもまれて経済環境は大きく変わって行きます。この間に水車は電力モーターに取って変わられますが、須永家の対応は鈍く従業員の必死の努力にも関わらず経営は悪化して行きます。小山市郊外、現在は閉園しておりますが、昔の小山遊園地跡に創設した農場の失敗や会津に所有していた山林も手放すことになります。明治三八年（一九〇五）の佐野市内の債権者には「愛蔵の書画、衣類も入質せざるをえない状況。事業清算の上で朝鮮に渡り起死回生を図りたい」と書きましたが、朝鮮半島や清国での利権につながる事業計画も結局は実現には至りませんでした。さらには久慈川の発電所建設計画事業などにも手を染めます。しかし、激変する経済構造変革の波は農業、水車業を圧迫し、大正年代には出資先の銀行の倒産などもあり苦境に立たされます。

こうして第二次世界大戦突入直後の昭和一七年（一九四二）七月一日に妻のタミさんと実の妹であるマサさんにみとられて、七五年の生涯を閉じました。葬儀は頭



写真8 死の床にて(中央が頭山満)

山満を初め全国から多数の政財界の有名人が参列し、妙頭寺において行われました。須永家は昔から水車業を営んでいたことから広大な屋敷の一角に水神様を祭っておりました。市が須永家から寄贈された跡地へプールを造る時に、大きな建物は壊されこれのお宮も壊されると聞いた妙頭寺の住職が遺族から譲り受けました。立派な彫りもので飾られた白木づくりのおやしろですが、建造年度や作者などはまだ特定されていません。須永の死後は敗戦による農地解放を始め、税金問題もからんで遺族は思わぬ辛酸をなめることになります。やがて養子一家も仕事の関係から佐野を離れ、佐野と距離もあることからご供養がなおざりになることを案ぜられ、昭和四二年（一九六七）に須永の骨は拾われて丁寧な供養を受けたのちに、妙頭寺から東京都内の日蓮宗の、あるお寺に移されました。さらに現在では遺族の都合により鎌倉霊園で永遠の眠りについています。

五、須永文庫について

元佐野市立図書館長、故・遠藤久三郎氏の「須永文庫目録の序」には次のように書いてあります。昭和一六年（一九四一）の晩秋に頭山満氏は、盟友の願いを受けて筆頭発起人となり、財団法人日朝志士記念会館を建設してこの資料を保存公開し、偉業を後世に伝えようとしたが、間もなく戦局の急変により計画は中断した。これらの資料は代表・広瀬仙藏氏の財団法人日韓国土顕彰会によって管理されていたが、昭和三七年（一九六二）の解散により須永文庫を一括佐野市に寄贈され、本館つまり佐野市立図書館のことで、資料の一切を継承するに至った。当時は図書館とは申せ、独立の庁舎もなく、小学校の一隅を借りて開設していた。太平洋戦争の末期から約二〇年間、無人であった須永邸に死蔵されていたために、資料の中にははなはだしい虫食いや、雨風による汚損、糸切れ等により、ほとんど原形をとどめぬ程破損、散逸していたものもあり、整理は困難を極めた。昭和四一年（一九六六）に洋装本約二五〇〇冊を収録、「須永文庫一般書目録」を発行した。昭和四三年（一九六八）より和漢古書の整理調査に精力的に取り組む、昨年これは昭和四九年（一九七四）のことですが、一応の整理を終えた。資料は大別して、図書資料約

一三〇〇〇冊、特殊資料図書資料以外のもの約一〇〇〇点である。目録は、漢籍・和洋書・特殊資料の三部に分け、それぞれ冊子にまとめ配布する予定で、ここに第一集として「漢籍・準漢籍の部」を発行した、とあります。現在はデータベース化がなされており、パソコン上で須永文庫の検索が出来ますので、昔日の感があります。

現在の須永文庫は佐野市立図書館には洋書装のもののみ収納されており、倉庫にある膨大な書籍を見せて頂きました。この本の数々を見ましたら、目録を読んだだけでははつきりとしませんでした。哲学、歴史、社会科学、自然科学、工学・産業、芸術、語学などありとあらゆるジャンルがそろっており、須永元の知識人としての素養が感じられました。また、佐野市郷土博物館には大多数の漢籍類そ

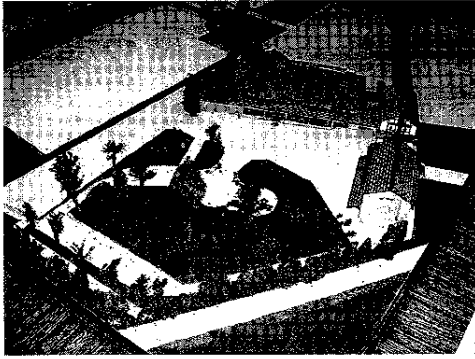


写真9 須永邸模型(佐野市郷土博物館所蔵)

の他に分けて保存してあり、館長のご厚意によりこれも見せて頂きました。これも量的に膨大にあり、これだけでも大きな倉庫が必要になる程です。豪農だったとは言え、良くこれだけのものを残したのだと感嘆せずにはいられません。これらのものは佐野市の財産で

あると強く感じました。同時に須永邸の模型も見せて頂きましたが、敷地の広さの割には建物の数が少ないと感じました。母屋と入り口の両端に倉庫らしき建物しかありませんでしたが、昔描かれた墨絵の須永屋敷の図を見ますといくつかの屋敷が描かれていますから、模型は市営プールを造る直前のものだと思います。

六・須永邸の跡地

須永邸の跡地に行ってきました。ほとんどが市営プールと駐車場になっておりますが、南側の一角に日本庭園の一部が残されており、池だった場所には黄色と紫の花菖蒲がたくさん咲き、また周りには名前を知らない花々も

いくつか咲いており、とてもきれいでした。これだけの庭園を作ることが出来たことから須永家の繁栄が伺えます。約三メートル程の築山があり、この上に直径四〇センチメートルほどの形の良い松が生えておりました。この築山にはチャートだと思われる比較的大



写真10 須永邸跡地に残る築山

きな自然石がありましたので、この小山は自然をそのまま利用したのでしょうか。また、石碑が一つあり須永与右衛門の名が刻まれております。帰宅後に調べましたら、この石碑は屋敷建設記念碑の一部のようです。この場所は直径三〇センチから四〇センチ位の太木が数本あり、小さな林を作っております。これらの木々は在りし日の須永邸を偲んでいるのでしょうか。しかし、驚いたことが一つあります。それは、この日の夜に京谷さん宅に行き、この日本庭園の写真を見たときです。この写真は二十数年前のもので、すからこの土地はすでに佐野市のものになっていたはずで、す。この写真の植木は選定されておとりとも素晴らしくきれいな日本庭園が写っております。それが現在では草がのびほうだいになっております。おそらく以前は公園として開放していたものだとは私は想像しました。利用者が少ないので公園としての機能は維持費用の関係から不要だと考え閉鎖してしまったのでしょうか。角田氏もここを訪れており、次ぎのような感想を書いております。「ゆるやかな起伏のある敷地内を歩くうち、私はその片隅に残された小さな池の水と築山を見出した。場所からいっても、もともと客間から見渡せる庭の主要な部分ではなかったであろうし、荒れるにまかせた歳月もすでに長く、見るかげもない一隅である。しかし、それでも江戸中期から続いたという旧家の格調は偲ばれた。にわか成金」の豪邸が古く

なつても、この奥ゆかしさは漂うまい」。

今も須永邸跡地に残る日本庭園ですが、角田氏は次ぎのようにも書いております。「ここは二十代の須永元が、師とも兄とも思う金玉均につきそう形で共に散歩した場所であろう。秋の日差しににぶく光る緑色の池を眺めて、私は改めてこの二人に共通点の多いことを思った。朝鮮の最上流階級に生まれ、国王と自由に話の出来た金玉均と、旧家とはいえ日本の一地方の豪農・豪商の息子であった須永元とを『同じく特権階級の出身』とはいえないが、純粹で理想家肌の氣質の前提には揃って、育ちの良さがある。二人とも美意識豊かな環境で成人している。さらに二人には共通の教養基盤を持っていた。儒教一辺倒の朝鮮に育った金玉均と語り合う上で、価値観その他すべてに抵抗はなかったと思われる」。

七. 祖父黄鉄を訪ねる旅

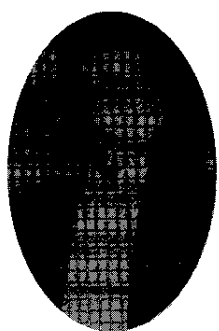


写真 11 黄鉄の肖像

妙頭寺にお墓がある黄鉄のお孫さんである音楽評論家の田川律氏が佐野を訪ねた時のことを「祖父黄鉄を訪ねる旅」として発表しておりますので一部を紹介しておきます。析



写真 12

左の椅子にかけている：元(18歳)
真ん中に立っている：弟・安三郎
右の日本髪姿：妹・ナカ(16歳)
前に座っている少女：妹・マサ(14歳)
右端の少女：末妹・キヨ(7歳)
(明治18年(1885)頃に撮影)

本県佐野市の図書館に「須永文庫」と呼ばれる一連のかつて日本にいた韓国・朝鮮の人たちが残した作品、詩や絵画などが所蔵されている。祖父が日本にいた当時、というから一九〇〇年の一〇年代だろうか、須永元という人がいて、彼は当時韓国・朝鮮の人たちにきわめて友好的で、彼らの面倒をさまざまな形でみていた。こと祖父に関していえば、祖父が描いた書画を日本の好事家たちに頒布することをしてくれていた。つまり祖父にとってはマネージャーみたいな仕事をしてくれていたわけだ。須永元の遺族は戦後すぐに彼が持っていた多くの芸術品をすべて佐野市立図書館に寄贈したという。それが「須永文庫」なのだ。

すでに一〇年以上前にいちど訪問したが、当時はまだ整理がすんでないということで閲覧が許可されなかった。

八 須永元と明治の文人たち

それからもう随分歳月が経ったことだし、と韓国へゆくまえにまずは出かけたのだ。「じつは東京から来たのですが、須永文庫を閲覧させてもらえないかと思ひまして」。受け付けで恐る恐る申し出たら、「どうぞこちらへ」と、事務所の中に招かれた。この前の時はそうカンタンではなかった気がする。それだけ整理も進み、文庫の存在も周知されるようになったのか。あとで気がついたが、じつはもう一〇年近く前に、「須永文庫」に属する書画の展覧会がここで開かれていたのだ。ということはよくが訪れたのはもつともつと前、ということになる。その時は図書館も近く改装されると聞いたが、なるほどとてもきれいになっていた。

田川律氏の言った書画の展覧会とは昭和六二年(一九八七)に佐野市郷土博物館で開かれた須永文庫資料展―須永元と明治の文人たち―でしょう。この中には先に若干紹介しましたが、二松学舎を創設した三島中洲、甲申の変を起こした朝鮮独立運動の志士・金玉均、元彦根藩家老の岡本黄石、咸臨丸を指揮して太平洋を横断して米国を訪れた勝海舟、二度に渡り日本に亡命した朝鮮李朝末期の政治家・朴泳孝などの書が展示されました。書の素晴らしさだけでは



写真 13 黄鉄(右)と禹範善(左)の墓
(妙顕寺)

なく、須永元が交流したそうそうたるメンバーと歴史が伺えます。この時には多数の書とともに何点かの墨絵も展示されており、さらに平成三年（一九九一）五月に佐野市郷土博物館第一六回企画展「須永文庫―水墨・山水画展」が開催されました。この時に展示された水墨・山水画は芸術に素人の私が見ても素晴らしいものです。これらの芸術作品の数々は、現時点では美術館を建設することには異論もあるでしょうが、仮に須永文庫専用の美術館を建設したとしても十分に鑑賞に耐えうるような優れた作品群だと私は思います。須永元自身の評価は各個人で異なる可能性もありますが、この須永文庫の美術品の数々が第一級品であり、佐野市の宝であることに異論を挟む人はいないでしょう。この時に何点か展示された作者の一人にさきほど紹介した田川氏の祖父で今は妙顕寺にお墓がある黄鉄がいます。この人は明治二八年の関妃暗殺事件に荷担して日本に亡命し、山口鉄郎と日本名に変え詩文・書画をもって各地を漫遊しました。その後韓国統監伊藤博文の知遇を得て農商工部協弁と

なっております。しかし、日韓併合後は政治を離れ、日本に移住して書画の道に専念したそうです。彼は須永家をひんばんに訪れ、書画会という作品頒布の集まりを開いている関係からこの佐野地方に彼の作品がかなり多く残されています。余談ですが、私は東京で墨絵展を見たときに、ほとんど黒の濃淡だけで描く墨絵の素晴らしさと奥の深さに驚かされました。まさに東洋の文化と言って良いだろうと思います。

これだけの美術品と書籍類を残した須永元は平民の子だったとは言え、財産家だった上に、文化や芸術に並々ならぬ知的好奇心を発揮し、かなりの知識人であったと思われます。須永は慶応義塾に入学しましたが西欧の学問にはあまり関心を向けず、二松学舎時代にすでに秀才とうたわれた彼はその後朱子学、陽明学を中心とした漢学に親しみました。しかし農業経営者としての須永の能力はいかがだったのでしょうか。父市重郎は元の家督を譲ったにも関わらず、なかなか佐野に帰って来ずに父をだいぶ困らせたようです。ただ水車業は「佐野割り」という大麦と小麦の加工があたつて家業は順調でした。ですから須永の農業経営者としての能力は良くわかりませんが、結局は時代の流れに抗しきれずに須永家は衰退し、最終的には没落に近い形になってしまったのだと思います。そして須永元が精魂こめて収集した須永コレクションとも言うべきものを「須永

文庫」として佐野市に寄附し、遺族の方々も結局は佐野を離れていくことになります。さらに最終的には須永文庫を残した須永元の墓も、ついには佐野から移されて現在に至っております。

九、須永元の評価について

須永元の人的な交流は国史大辞典に載っているような大人物だけでも、三島中洲、岡本黄石、三浦梧楼、田中正造、勝海舟、福沢諭吉、そして伊藤博文などがあります。また李氏朝鮮王朝時代からの日本への亡命者だけでも。甲申の変に関与した朝鮮独立運動の志士・金玉均、朴泳孝、そ



写真 14 金玉均筆の扁額(妙顕寺)

して閔妃暗殺事件に関与したとされる禹範善、そして黄鉄。これらに人物は全て日本の近代史を学ぶ上で避けることの出来ない人たちであり、それぞれが人物辞典に登場する人ばかりです。これらの人たちがかなり深い交流があったと言うだけで須永元と言う人物は注目

に値すると思います。佐野市の近現代史を考える時、私が思うには田中正造を別格とすればこれほど歴史的な人物と交友を持った人物は他に見あたらないと思うほどです。この度、下野新聞社の栃木県歴史人物辞典で、佐野地方の人物を調べましたら、尚のことこの思いを強くしました。しかし、これ程の人物でありながら、しかもこれだけのものを残していないながら、なぜ須永元に関する資料は私の探し出す努力が足りないのかも知れませんが、非常に少ないように感じました。私が入手した資料としては、知人なので先生とは呼びませんが、桐生市在住の藤沼博さんの数編の論文、元佐野市立図書館長であった故・遠藤久三郎氏の須永文庫目録の序、元佐野高校教諭・糸川信也先生の論文、そして佐野史跡写真帖などです。他にもいくつかありました。が、非常に簡単な記述だけです。角田房子著、新潮社出版の「閔妃暗殺、朝鮮王朝末期の国母」には、作者が佐野市の郷土博物館で須永文庫を調査したことが述べられております。また彼女の「我が祖国」にも須永元のことがかかります。詳しく述べられており、この書は約一〇年程前にNHKスペシャルで放映され、その時に佐野市の禹範善や黄鉄のお墓と堀米町の旧例弊使街道が映し出されましたから、知っている人も多いと思います。この禹範善の子供は禹長春と言ひ、東京帝国大学の付属校(現在の東京農工大学)を抜群の成績で卒業し、白菜の改良や種なし西瓜の開発で素晴ら

しい業績を上げた人で、我が祖国の主人公です。須永元はこの禹長春の生涯にも多大の影響を与えたと言われている。ます。

では須永元がなぜ佐野市民の方々にあまり知られていないかと言うと、これは私の推定にしか過ぎませんが、次ぎのような理由からだと思うのです。それは、須永元が間接的に関与した甲申の変をとつても国内に様々な見解があります。歴史事典によりますと、甲申の変の性格をどのようにみるかは、朝鮮における自主的近代化への可能性の有無を規定する重要な問題となるとあり、日本近代史家の一部には甲申の変の推進主体としての開化派の役割を否定的にみて、朝鮮近代史における甲申の変の進歩的役割を完全に否定する見解がある、とあります。また、閔妃暗殺事件においても韓国では知らない人がほとんどないにも関わらず、日本では知っている人が少なく、両国の間に認識の溝を感じます。さらに日清戦争、日露戦争があり、イギリス、フランス、ロシア、アメリカと日本の圧力が加わり朝鮮半島の政情は一段と複雑になっていきます。そして一九一〇年、明治四十三年に日韓併合となり、朝鮮総督府がおかれます。そんな東アジアの政治状況の中で生きた須永元を、それなりに評価すると言うことは当然日本の政治状況を東アジアとさらには欧米列強の国々との関係も考慮に入れなければならず、評価のしかたによると極端な話、国際問題にまで

発展する可能性もなきにしもあらずだと思います。そのような背景の中で、これまで善し悪しは別としても須永を評価する人が極端に少ない原因の一つとなっていたのではないのでしょうか。

十、須永元の願い

私は須永元の次ぎのエピソードが彼の功績や評価を決める一つになりうると考えております。金玉均の二三回忌を機に、頭山滿らが太閤重信首相、寺内正毅朝鮮総督に、金玉均の「日韓友好」の功勞に対して贈位顕彰を建議し、これが帝國議會に提出されました。これに対し須永元は厳しい批判を向けて次ぎのように書きました。「朝鮮の今日あるのは居士の志に非ざるなり。居士の眼より視れば我が國は敵國なり。敵國より贈位せられたりとなつて何の喜びかあらん」。金玉均の二三回忌は一九一五年に行われたと書かれていますから、「日韓併合」により朝鮮が日本の植民地となつたのはそれよりも五年前でした。その後朴泳孝は日本政府から男爵という高い爵位を贈られています。須永はさらに「余善く居士の心情を解するもの」とも書いています。これは、金玉均が命を賭して求め続けてきた祖国朝鮮の未来図は、決して今日のような日本の属國としての姿ではなかつた、と言う意味と解されています。それは須永

自身の、日本の対韓政策に対する鬱屈した心情、許し難いとする憤懣を語るものだとも言われて、彼が心の底から日本と朝鮮との友好を願っていたのはまぎれもない事実であると私は考えております。

一九四五年、昭和二〇年に朝鮮半島の日本における植民地支配が終わりました。その後の朝鮮半島は朝鮮戦争により二つの国、大韓民国と北朝鮮・朝鮮民主主義人民共和国に分かれました。日本の植民地支配が終了して六八年以上経過しているにも関わらず、朝鮮半島の二つの国と日本は過去の暗く不幸な歴史をそのまま引きずり、決して良好な関係を維持しているとは言えないと思います。戦後補償の問題、従軍慰安婦問題、そして近頃問題になっている歴史教科書問題、靖国神社公式参拝問題、永住外国人地方参政権付与法案などがその都度問題になります。

終わりのないむすび

須永元が亡くなってからもう既に七〇年以上の歳月が過ぎ去りました。まだまだ国対国とのわだかまりを取り除くには数多くの人々の努力と時間を要するとは思いますが、個人の業績を評価するには七〇年と言う年月は十分であると私は考えます。プロとアマとを問わず、須永文庫とは別に、あれほど政治の世界に首をつっこみながら自らは政治



写真 15 須永元の葬儀(中央右が頭山満)

家にはならなかった人間須永元を、あらゆる角度から再研究再評価することが必要な時期に来ていると思います。藤沼さんも、私達は我が国の過ちを素直に認めると同時に、日本人の中には須永元のような人物もいたという事実を認めてほしいと願います。私財を投じ、一身の栄達を考えるよりも、亡命政客をかくまい、救援することに、彼等の意図する祖国独立のために青春のたぎる思いを賭けた人物としての須永元を正しく評価して欲しいと思います、と述べております。もちろん偉人化する必要は全くありませんが、その時代における適正な評価は必要なのではないでしょうか。人間須永元と言う人物を介して、日本と大韓民国と北朝鮮・朝鮮民主主義人民共和国及びその二つの国の、在日の方々との真の友好を築くことができました、鎌倉霊園で永遠の眠りについていて彼もきっと喜んでくれるに違いありません。突き詰めれば、国と国との友好も結局は個人と個人の友好に行き着くと

思うからです。

須永元と言う人間があまりにも佐野市内で知られていないと感じています。せめて須永邸跡地には須永元に関する説明板位の設置くらいは最低でも必要なのではないでしょうか。まぎれもなく須永元は佐野市が生んだ人物であるし、そうすることが須永元から須永文庫をプレゼントされた佐野市民の責務のような気がしているのは私だけでしょうか。ぜひ佐野市としても須永元を、あらゆる角度から見直して頂きたい。そして出きうれば須永文庫の常設の展示館を、もちろん贅沢な建物は全く必要とはしませんが、佐野市民がいつでも須永文庫に触れられるような空間を設置し、朝鮮半島の二つの国々との真の友好に役立てて頂きたいと考えております。

藤沼博さんを偲んで

もう十年以上も前になりますが、安蘇史談会に関わりのあった、須永元の研究では第一人者である藤沼博氏がお亡くなりになりました。私が二〇〇一年の六月定例佐野市議会で「須永元と須永文庫」について質問をしましたが、その時に藤沼さんの論文をたくさん参考にさせて頂きました。また藤沼さんとは安蘇史談会を通して知っていたのと議会での質問を行う上で論文に大変お世話になった関係上、六

月議会のビデオテープと議事録を桐生市の自宅にお送りし、批判を仰ぎました。しかし、お返事は頂けませんでした。知り合いを通して「早く返事を出さなくては」と言っているらしかったと聞いております。

藤沼さんの亡き今、佐野市が生んだ文人・須永元を少しでもたくさんの人たちに知ってもらおう責務が、私にわずか生じたようにも感じましたので、一般質問の内容を加筆訂正し、ここに一つの作品として仕上げました。これを書くに要した膨大な時間の割には、満足いくものではありませんが、少しでも須永元を知ってもらうために役立てることでできると考えております。または藤沼さんの供養にもなると考えました。最後に藤沼さんのご冥福をお祈り致します。

また様々な批判に耐えながら、韓国・朝鮮との友好に最後まで尽力されました角田房子氏も鬼籍に入られました。心からご冥福をお祈りしたいと思います。

謝辞

本文をまとめるに当たって、現地確認を含めて多大なる助言並びに写真の提供や助言をして頂いた京谷博次氏、また歴史的観点から須永元を話して下さった佐野市助役(当時)石田正己氏にもお礼申し上げます。

さらには資料の提供を頂いた佐野ユネスコ協会の遠藤康次氏、お話を聞かせて頂いた須永元のご遺族の方、禹範善・禹長春のご遺族の方、元佐野市郷土博物館長であった武井信二氏、元佐野市立図書館長であった飯田友士氏及び植木文七氏、大阪の医師・姜健栄氏並びに名古屋の須永元研究家・朝井佐智子氏、インターネットのメールで助言を頂いたたくさんの方々のご協力に対して、この場を借りて感謝申し上げます。

須永元参考文献

- 『妙顕寺と二人の亡命韓国人』藤沼博 昭和六〇年（一九八五）あゆみ（第五号）阿曾探幽会
- 『須永元と「須永文庫」』藤沼博 昭和六〇年（一九八五）史談（第1号）安蘇史談会
- 『須永元と「須永文庫」―続報―』藤沼博 昭和六一年（一九八六）史談（第2号）安蘇史談会
- 『明治二十年代の青春群像「須永元日記を」を読む』藤沼博 昭和六三年（一九八八）史談（第4号）安蘇史談会
- 『晩年の須永元と朝鮮半島の仙人たち』糸川信也 平成元年（一九八九）史談（第5号）安蘇史談会
- 『秋山川畔の飛行機遭難の記念碑』黒田哲哉 平成一六年（二〇〇四）史談（第20号）安蘇史談会
- 『佐野史跡写真帳』栃木県佐野史跡保存会 昭和九年（一九三四）昭和六〇年（一九八五）復刻

『妙顕寺と海を越えた亡命者』藤沼博、昭和六三年（一九八八）妙顕寺
『須永元その三つの顔』藤沼博、昭和六二年（一九八七）須永文庫資料展 佐野市郷土博物館

『須永元と韓国人士との交流』藤沼博、平成三年（一九九二）水墨・山水画展 佐野市郷土博物館

『禹長春』阿久津昂 平成三年（一九九二）栃木新聞

『須永元・人とその時代』藤沼博、昭和六一年（一九八六）佐野市立図書館講演会

『須永文庫目録の序』遠藤久三郎 昭和五〇年（一九七五）和洋書の部 佐野市立図書館

『須永文庫と須永元氏』遠藤久三郎 昭和五〇年（一九七五）須永文庫目録（漢籍、準漢籍）佐野市立図書館

『わが祖国』角田房子 平成六年（一九九四）新潮文庫

『閔妃暗殺』角田房子 平成五年（一九九六）新潮文庫

『開化派リーダーたちの日本亡命』姜健栄、平成一八年（二〇〇六）朱鳥社

『須永元―金玉均を支援した日本人―』朝井佐智子 平成二〇年（二〇〇八）愛知淑徳大学 現代社会研究科研究報告第3号

『須永元をめぐる韓国亡命政客群像―その思想と軌跡』西山武彦 昭和六一年（一九八六）月刊韓国文化 韓国文化院

『呉と韓国』竹川和登 平成二〇年（二〇〇八）ホームページ次代を見据えて

『須永元と金玉均の絆』松本富生 平成二二年（二〇一〇）時代 栃木県文芸家協会

須永 元(輓齋)・家族関係年表

番号	年 月 日	西暦	事 項	備 考
1	文政 3/7/24	1820	元の祖母で祖父 重太郎の妻トヨ生まれる。 佐野町広瀬幸右衛門の長女。	
2	弘化 元 /8/20	1844	元の母テウ生まれる。佐野町須永孫作二女。 入籍は文久3年(1863)3月8日。	
3	弘化 2/8/12	1845	元の父 市十郎、祖父 重太郎の長男として生まれる。	
4	明治 元 /6/1	1868	元、父 市十郎の長男として生まれる。 幼名は平十郎だった。	
5	明治 3/4/8	1870	元の妹ナカ(長女)生まれる。 ナカは明治22年(1889)6月25日、梁田郡御厨 村福居稲村兼次郎と離婚復籍。 同年6月24日死亡、19歳。	
6	明治 7/11/14	1874	元の弟 安三郎(二男)生まれる。 安三郎は明治25年(1892)7月29日、相沢家名 を廃して復籍。同年同月日死亡、18歳	
7	明治 9/12/4	1876	山口県阿武郡萩町佐藤與三の二女として、元の妻 タニ生まれる。	
8	明治 9/4/24	1876	元の妹マサ(二女)生まれる。	
9	明治 11/9/16	1878	元の妹キヨ(三女)生まれる。 キヨは明治39年(1906)4月14日岡山県大井村 の守屋善兵衛と結婚除籍。	頭山満 明治14年、玄洋社設立
10	明治 16/12/25	1883	父 市十郎退隠、元(当時は平十郎)が家督相続する。	明治17年(1884)12月4日甲申事変
11	明治 23/8/8	1890	平十郎改名して元となる。	
12	明治 25/7/29	1892	弟 安三郎死亡	
13	明治 25/8/21	1892	祖母トヨ死亡、71歳	
14	明治 30/1/29	1897	佐藤タニと結婚入籍	明治27年(1894)日清戦争おきる
15	明治 31/3/22	1898	佐藤タニと離婚、タニは山口県萩町佐藤與三方へ 復籍。 尚、タニは昭和10年代佐野の元宅で死亡してい るので、再婚した？	1895/10/8 京城でクーデター 閔妃 殺害
16	明治 31/7/15	1898	父 市十郎、市重郎と改名	明治33年黒竜会設立
17	明治 37/7/21	1904	父 市重郎、佐野町2×××番地へ分家届出。 妻テウ、妹マサ、キヨとともに分家して、戸主 元 の戸籍をぬける。	日露戦争
18	明治 37/7/21	1904	元、本籍地変更届出る。	
19	明治 37/9/26	1904	元の本籍地を東京府北豊島郡日暮里村大字金杉× ××番地へ転じ、同月28日除籍さる。	
20	大正 4/3/31	1915	母テフ、本籍地(佐野)で死亡、70歳。	
21	大正 12/6/10	1923	父 市重郎死亡、78歳。二女マサ家督相続届出。 同年6月26日受付。	
22	昭和 14/4/11	1939	元の妹マサ佐野町本籍地で死亡。同居者元届出。 マサ63歳。	昭和5年12月29日 黄鉄死亡
23	昭和 14/11/9	1939	マサ死亡により、同番地の須永新吉、すゑ夫婦の 二女洋子(昭和6年11月16日生まれ)、当時8 歳を選定家督相続人として届出。親権を行う者な ぎため、後見人として、同町2073番地須永元が つく。昭和15年1月24日受付。	第二次世界大戦
24	昭和 17/7/1	1942	元死亡75歳。元の死亡により洋子の後見人に佐 野市本町2×××番地広瀬仙蔵となる。昭和18 年9月21日受付。なお、広瀬仙蔵は昭和23年4 月7日、後見人を辞任。昭和24年10月25日、 洋子は母の氏を称する入籍届出。父 須永新吉の戸 籍に戻って除籍さる。	昭和19年盟友頭山満死亡
25	昭和 20/8/15	1945		敗戦

朝鮮・韓国史年表

番号	年月	西暦	事 項	その他の事項	備 考
1		1392	李成桂、高麗を滅ぼし李氏朝鮮王国を開く。 この頃、対馬に盛んに侵攻。		南北朝合一
2	文安 3	1446	『訓民正音』制定して頒つ。	1453 東ローマ帝国滅ぶ。	応仁の乱 1467
3	文禄元	1592	豊臣秀吉第 1 回侵略(壬辰倭乱=文禄の役)。		秀吉の全国再統一 1590
4	慶長 2	1597	豊臣秀吉第 2 回侵略(丁酉倭乱=慶長の役、1598 年まで)。		英東印度会社設立 1600
5	慶長 14	1609	日本と乙酉条約を結ぶ		徳川幕府成立 1603
6	元和 4	1627	後金の侵入(丁卯胡乱)後金、清と改号。		
7	寛永 13	1636	清軍再度侵入(丙子胡乱、1937 年まで)。	1644 明滅び清になる。	清、北京に入る
8	天明 5	1785	西学禁止。この頃、外国船来航。	87 年に仏艦、91 年洋書厳禁、 97 年英艦	米独立宣言 1776
9	享和元	1801	天主教大弾圧(辛酉の獄)。官奴婢解放される。		大塩平八郎の乱 1833
10	文化 8	1811	平安道農民反乱(辛未、洪景来の反乱。1812 年まで)		アヘン戦争 1840
11	天保 11	1840	外国船、朝鮮近海にしきりに出沒。	1851 嘉永 4 金玉均生まれる。	太平天国の乱 1850
12	万延元	1860	崔濟愚、東学を創始。	1861 文久元朴泳孝生まれる。	日米和親条約 1854
13	文久 3	1863	哲宗王、実子なく死去。 李熙閣宗王即位、実父李是応執政権始まる。		
14	元治元	1864	崔濟愚刑死。太平天国滅亡。この年、黄鉄生生まれる。		四田艦隊下関を攻撃
15	慶應 2	1866	天主教大弾圧(丙寅教獄)仏艦江華島攻撃、米艦大同江で焼かれる。丙寅洋擾。		日本王政復古 1867
16	明治 2	1869	日本の修交要求拒否。	1871 米艦江華島攻撃、辛未洋擾	
17	明治 6	1873	大院君失脚。閔氏一族政権をとる。		征韓論争おきる。
18	明治 8	1875	日本軍艦雲陽号江華島を侵す。	1876 軍事脅迫下、日朝修好条約調印さる。	福沢「文明論之概略」
19	明治 14	1881	嶺南儒生万人疏、衛正斥邪を主張。	1877 日本で西南戦争おきる。 自由民権運動	第一銀行釜山支店開く 1878
20	明治 15	1882	壬午の軍人反乱、金玉均ら謝罪使として訪日。 この年、朝米修好条約調印		福沢「時事新報」創刊
21	明治 16	1883	朝英、朝独通商条約できる。仁川開港。元山、釜山港も。		仏軍安南侵攻、対清戦争へ。
22	明治 17	1884	金玉均ら甲申事変おこす。3 日天下に終わり、日本に亡命。 この年、朝露、朝伊条約。		加波山事件、秩父事件
23	明治 18	1885	英艦巨文島占拠(87 まで)	1886 日本政府、金玉均を小笠原へ移す。	福沢「脱亜論」
24	明治 22	1889	日本防殺令事件おこす('93 まで)	1894 明 27 金玉均、上海で暗殺される。	帝国憲法発布
25	明治 27	1894	甲午農民戦争(東学党の乱)。甲午改革。日清戦争おきる。		帝国議会 1890
26	明治 28	1895	全奉準処刑さる。乙未の変。国王奪取。閔妃殺害事件。 初期義兵蜂起朝鮮反乱。		下関条約、三国干渉
27	明治 29	1896	金弘集政権倒れる。国王ロシア公使館に移る。独立協会設立。		中国、孫文革命派起つ
28	明治 30	1897	国号を「大韓帝国」と改め、年号を「光武」と定める。	1902 第 1 銀行券通用す。	日英同盟
29	明治 37	1904	日本、日韓議定書強要。軍事占領。第一次日韓協約、顧問政治。		日露戦争
30	明治 38	1905	乙巳「保護」条約。第二次日韓協約強要。義兵闘争。 国権回復運動。		日比谷焼打事件
31	明治 39	1906	孫秉熙、東学を「天道教」に改編。伊藤博文総監着任。		
32	明治 40	1907	ハーグ密使事件、第三次日韓協約。 高宗王退位強要、軍隊反乱、解散へ。		
33	明治 41	1908	日本、東洋拓殖 KK 設立、全国に暴動おきる。		
34	明治 42	1909	安重根、ハルビンで伊藤博文を射殺。日本、司法事務接收。 軍部廃止。合邦声明。日本に委任、朝鮮総督府設置。		
35	明治 43	1910	「日韓併合条約」強要。土地調査事業開始。 警察権日本に委任。		辛徳秋水ら処刑